

高崎ユネスコ協会会長賞

小さな協力

高崎市立長野郷中学校 三年 中澤 歩香

私たちが「お腹が空いた」と思う時は、どんな時でしょう。運動した後。授業中のふとしたとき。あるいは夜遅くまで勉強しているとき。私たちはそんな時、それほど困ることなく、わりと簡単に食べ物を口に入れることができます。しかし、私たちの生活の裏側でいつもお腹を空かせ、飢餓に苦しんでいる人もたくさんいます。

国連機関によると、二〇二〇年の世界の飢餓人口は劇的に悪化しています。世界人口の約十分の一にあたる八億人以上が栄養不足に陥ったと推定されているのです。そして、その原因の一部は新型コロナウイルスの影響です。水や食料の配給もなく、医療も受けられないというひっ迫した状態が続く地域が、世界中で増加しています。

もし、不自由なく暮らしている私たちのような若者が、こうした国や地域の人々と同じ生活をすれば、きっと三日ともたないことでしょう。もしかすると、この先の生活を悲観し、楽になりたくて自らの命を絶つことさえ考えてしまうかもしれません。それなのに、飢餓に苦しんでいる国の人々は、生きる希望を失ってはいません。特に、子どもたちは、その目をきらきらと輝かせながら、やせ細った体を気力だけで支え、懸命に未来を見つめているのです。そんな生きることにはけなげで、前向きな彼らを、私は見て見ぬふりをすることはできません。

私は今、ガールスカウトに所属しています。現在中学三年生で受験も控え、日々勉強に追われた生活を送っています。しかし、こうしている間にも、飢えに苦しむ子どもたちの命が失われていきます。彼らの美しい瞳の輝きが一つ、また一つと消えてゆくのです。問題の解決は一刻を争います。そこで、私たちはガールスカウトとして、プロジェクトを立ち上げ、国際団体を通じて、貧困や飢餓に苦しんでいる子どもたちのために募

金や慈善活動への参加を始めました。街頭に立ち、チームが募金活動を行っている、小さい子からお年寄りまでたくさんの層の人が協力してくれます。その集めたお金はすべて、経済的に支援が必要な国に寄付されます。その寄付金のほとんどは食糧支援物資の配給に使われます。その他、子どもの教育への援助資金や教育の環境整備にも使われます。私は、私と同じ年齢の子が仲良く笑顔で食べ物を分かち合っている姿を想像しながら、募金活動を行いました。そのとき、私は、はっとしました。お腹が空いて好きなものを食べたときに抱く喜びを、彼らがどれほど待ち望んでいることだろうと。また、私自身、いつも食べたいときに食べられるという幸福にどれほど鈍感に生きてきたのだろうと。今までの生活が当たり前だと思っていた私にとって、この「当たり前の生活は世界では通用しないのだ」と、はっきりと自覚した瞬間でした。「当たり前」という言葉の裏側に潜む悲しい真実に気づかされ、私は愕然としました。

ガールスカウトの活動は、私にたくさんのことを学ばせてくれました。私たちは日本という国の豊かさに感謝をし、そこに暮らす私たちがどれほど恵まれた食生活を送っているのか、今一度、ふり返る必要があると思います。

現在、貧困国だけでなく、紛争地域でも、紛争によって、一千万人近くの子どもたちの命と生活が脅かされているといわれています。私の母は外出する際、必ず百円募金をしています。私たちのほんの小さな行動が、大きな「うねり」となり、世界が変わったら嬉しいです。これからも世界に目を向け、視野を広くして行動を起こしたら、世界の人々が幸せに暮らせるための明日へのステップにつながるのではないかと、私は信じています